

再現できない「手応え」

刺さったと言われることはある。だが、理由はわからない。

現在の反応状態

- 「刺さった」と言われる投稿があるが、毎回ではない
- 手応えに波があり、なぜ反応が良かったのか言語化できない
- 良い反応を「偶然」と感じてしまい、安定して出せない
- 自信が削れ、次に何を書けばいいか迷いが生じている

なぜあの投稿は届いたのか？ 共通する要素を抜き出す

整えすぎていない、 「体温」がにじんでいる。

- 過去の自分という「一人の感情」が色濃く入っている
- 未完成な揺れや、小さな事実がそのまま残っている
- 説明で埋め尽くさず、読み手の「余白」が存在している

共通点の核心

感情の事実 / 一人への焦点 / 未完成の許容

「上手い文章」ではなく「生身の言葉」が、接続の鍵でした。

「刺さる」をセンスのせいにはしない

バズや共感は、 偶然ではない。

× 捨てていい誤解

うまい文章、完璧な構成が必要だ
圧倒的な情報量があれば届く
正しさを追求すれば信頼される

○ 直視すべき事実

再現性は「構造」の中に存在する
完成度よりも「納得度」を優先
正しさよりも「手触り」が重要

構成を整えるほど、共鳴のトゲは削られていきます

「綺麗さ」を捨てて「生々しさ」を残すことが、再現への第一歩です。

「余白」と「事実」を配置する

【焦点】 一人にピントを合わせ、情景を置く

【事実】 感情の事実と、迷いの揺れを残す

【余白】 解釈を急がず、結論を後ろに下げる

説明を削り、状況が浮かぶ「一文」を入れる。

読み手が自分の記憶と接続するための「隙間」を創ります。

正解を与えるのではなく、問いが生まれる場所を作ること

「自分の話」として届き出す

波のある手応え → **共感される基準が明確になる**

表面的ないいね → **DMで具体的な感情が返る**

一度きりの印象 → **記憶に残る「あの人の言葉」へ**

迷いながらの執筆 → **再現性のある投稿設計の確立**

過去の「刺さった」を分解する

1. 過去、最も反応が良かった投稿を一つ選ぶ
2. そこに含まれる「小さな事実」を一つ書き出す
3. 一年前の自分が抱えていた「感情一語」を足す
4. 綺麗な言い換えを、あえて「不器用な言葉」に戻す
5. 結論を書かずに、読み手への問いかけで終わらせる
6. その構造のまま、新しいテーマで一本投稿する

共感の「鮮度」を保つ羅針盤

主な活用シーン

刺さった投稿を再現したい時
自分の言葉に「体温」がない時
整えすぎて個性が消えた時
反応に波があり不安な時

点検項目

- ✓ 感情の「事実」が置かれているか？
- ✓ 整えすぎて「余白」を消していないか？
- ✓ 「たった一人」の顔が見えているか？
- ✓ 結論を急ぎすぎているか？

反応があった時こそ、この資料で「なぜか」を特定してください。

「構造」を、手に入れる。

過去の刺さった投稿を分析し、共通点を抜き出す
三投稿分、意図的に感情と余白を配置する

止まったら再確認。構造が合えば、一步は軽い。